

問いの中にも手がかりがあります

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(田村理江『うす灯』より)

----- 本 文 -----

行数

「吉永さんの家は、こっちのほうなの？」

「いいえ。向こう。」

玲香は、まったく反対の方向を視線で示した。

「じゃあ、寄り道？」

「ええ。」

私立の女子校は、規則が厳しく、ほんのすこしの寄り道も禁止されている。優等生の玲香が、みずから規則を破るなんて。思わず、

「どこへ？」

などと聞いてしまったから、京子は自分の無遠慮ぶえんりよさに気がついた。どこへ行こうか、人の勝手だ。玲香は、いやな顔をするにちがいない。ところが、

10

「ここよ。」

玲香は、聞かれるのを待っていたように、ポケットから一枚の名刺めいしをだした。<*骨董屋・うす灯> アドレスを見ると、この近らしい。

「吉永さんって、アンティークに興味があるの？」

「ぜんぜん。」

首をふった。細い首だ。その繊細せんさいな首に、繊細な頭がのっている。京子は、前に母親と見にいった、ロセッティの絵を思い出していた。あの画家がえがく女性たちに、彼女かのじょは似ている。

「なら、知り合いの人のお店？」

「いいえ。おととい、学校の帰りに、男の人に呼びとめられたの。わたしの父より、すこし年上めがねくらいの眼鏡をかけた人。その人がね、これを売ってほしいって、熱心にいったのよ。」

20

玲香は、右手の鞆かばんをゆらした。

「売ってしまうの？」

「ええ。やっと決心けつじんがついたの。」

「もったいない……」

大きな鞆は、玲香のトレードマークになっていた。彼女が、みんなと同じ紺こんの布バッグを下げたところなんて、想像できない。

「もったいないよ、それ、すてき。」

思ったとおりを口にしたら、

「ウフフ。」

玲香が笑った。はじめて見るような、すがすがしい笑顔。^{えがお}

30

「どうしても、これを売ってしまう必要があるの。ねえ、斉藤さん。もしよかったら、わたしといっしょに、このお店へ行ってくれない？直前で手ばなしたくなかったら、いやだから。」

今まで、人に頼^{たよ}ることのなかった玲香が、<いっしょに>を強調して、京子にあまえた。彼女の<感情>が、ほんのちょっと見えた気がした。

「いいけど……」

「そこの角を曲がって、路地の先らしいわ。」

京子は、このあたりの地理にくわしい。かわいい雑貨屋や、きれいな小物店は、だいたいチェック済みだった。けれど、<うす灯>という名は、はじめて聞く。新しくできた店なのかもしれない。玲香と肩^{かた}をならべて、歩きだした。

「吉永さん、代わりましょうか？」

40

「えっ？」

「わたし、ロッカーに荷物、置いてきたから、手が軽いの。あなたの鞆、重そうだから、わたしが持ってあげましょうか？」

玲香が、またすばらしい笑顔を見せながら、

「だいじょうぶよ。」

やさしく首をふった。その仕草で、彼女が心を許しているのを実感した。今なら、聞けそうだ。ずっと気になっていた、あのこと。

「吉永さん。その鞆の中には、何がはいつてるの？」

瞬間、玲香の顔^{かほ}に影^{かげ}がさした。悪いことを聞いてしまった。京子は、あわてた。

「あ、べつに答えてくれなくていいの。無理に、いやなら——」

50

「うん。ほんとうは誰^{だれ}かに聞いてもらいたかったのよ。」

鞆を、京子のほうに差しだした。

「開けてみる？」

しばらく沈黙^{ちんもく}が続いた。

「いやよ。」

京子は、こわかった。これを開けたら、とてつもない怪物^{かいぶつ}があらわれ、京子^{おそ}に襲いかかるよな気がしたから。

「この鞆は……」

玲香は、自分の鞆をじっと見つめている。

「姉^{あね}のなの。わたし、九つ違いの姉^{あね}がいたのよ。」

60

「へえ。」

家族の話が彼女から聞くのは、意外な感じがした。玲香には、親も兄弟も、知り合いさえもない、*孤高なイメージがふさわしい。

「高校の入学祝いに、姉がもらった鞆なの。姉は、とても気に入って、大切に使っていたわ。形がくずれないように、雨の日はぜったいに持たない、って。」

確かに、いい鞆だろう。質がよく、高そうだ。

「わたし、まだ小学校にはいったばかりのころでしょ。姉の持つ物が、なんでもすてきに見えて、この鞆もほしくてたまらなくなかったの。もちろん、貸してくれなかったわ。それで、わたし、一週間くらい泣きつづけたの。これをくれなきゃ、ごはんも食べないって、ダダをこねて。」

通りを曲がると、細い路地が、まっすぐに続いていた。

70

「母親は、わたしに合う、かわいい鞆を代わりに買ってきたわ。でもわたしは、受けつけなかった。どうしても、これじゃなきゃ、いやだから。あんまりわたしがうるさいものだから、母親は、今度は姉にあきらめさせるように、説得をはじめたの。姉はとうとう、わたしに負けて、この鞆をくれたの。そのときの姉の悲しそうな目、今でもおぼえてるわ、はっきり。」

言葉を、区切った。路地の先には、ぼんやりとした白い灯が見えていた。遠いまなざしで、玲香は、その灯をながめている。

「それ以来、姉はわたしのほしがる物を、素直すなおにくれるようになったわ。自分で気に入って買った物でも、大切な人にもらった物でも、なんだったくれたわ。わたしは、女王さまの気分だった。美しい絵本、流行のCD、華はなやかな洋服、かわいいぬいぐるみ……。鞆の中に、奪うばった物をひとつひとつ、詰めていったの。わたしは、姉の物たちのおかげで、ずいぶんおとなっぽくなっ80たし、知識も豊富になった。だけど……」

京子は、言葉をはさむのを、ためらって、あいづちさえ打たなかった。たぶん玲香は、自分の話を、自分自身に語りたいのだろう。

「姉は去年、誰にも相談なしに、遠い国へお嫁さんよめに行ってしまったの。もう二度と家に帰らないような気がするわ。家を出るとき、姉は幸せいっばいな顔で、こういったの。『玲香ちゃん。わたしはやっと、自分だけの鞆を探しにいけそうよ。』それを聞いて、わたし、はじめて鞆の重さに気がついたの。詰めこみすぎて、パンク寸前で、どうしていいのか、わからなくなったわ。」

涙声なみだごえになっていた。隣となりにいる玲香が、いつのまにか、小さな小さな女の子に変わってしまった。「この鞆の中には、わたしの子どもじみたわがママや、愚おろかな優越感ゆうえつかんが、いっばいはいつているの。自分への反省と、姉への罪ほろぼしのために、わたしはずっとこの鞆を持ちつづけたわ。」90

路地のつきあたりに、レンガ色をした建物が見えてきた。白い灯は、あそこにともっている。看板に、<うす灯>という店の名が読めた。

「けどもう、解放されても許されるかな、と思ったの。あの店に売ってしまえば、わたしはもう一度、やさしい人間になれるかなって。」

「わたしは、ひとりっ子だから——」

店の近くまで来たとき、京子はようやく、言葉をはさんだ。

「吉永さんの鞆が、どれほど重いのか、よくわからない。でも、吉永さんが、ほんとうにやさしい人だってことは、よくわかってる。」

ドアを開いて、店の中にはいった。カウンターにすわっていたロイド眼鏡の主人が、玲香に気づき、

100

「いらっしゃい。やっぱり来たね。」

鞆に視線を落とした。

「お嬢ちゃんには、こんな物、もういらないだろうよ。」

主人は、鞆をカウンターに載せ、金のファスナーを一気に開いてみせた。中は、

カラッポだった。

注 * 骨董……美術的な価値や希少価値のある古美術品や古道具類。アンティークのこと。

* 孤高な……高い理想を持ち、独りはなれているさま。

問い

下線部「やっと決心がついたの」とありますが、鞆を売ることによって玲香は自分がどのようになれると考えていますか。「解放」という言葉を用いて、40字以上50字以内で書きなさい。

40字

50字